

十二年の手紙

上 卷

宮本顯治・宮本百合子



筑摩叢書 41

筑摩叢書 41

十二年の手紙

上 卷

宮本顕治・宮本百合子



筑摩書房

宮本 顕治 (みやもと けんじ)

1908年 山口県に生まれる

1931年 東京帝国大学経済学部卒業

著 書——「敗北の文学」「民主革命の諸問題」「共産主義その理論と実践」「人民民主主義革命の展望」「自由と独立への前進」「人民の文学」「百合子追想」など。

宮本百合子 (みやもと ゆりこ)

1899年 東京市に生まれる

日本女子大学英文科中退

1951年 1月21日没

著 書——「宮本百合子全集」全十五巻

十二年の手紙 上巻

筑摩叢書 41

昭和40年 5月30日 発行

¥ 380

著 者	宮 本 顕 治
	宮 本 百 合 子
発 行 者	古 田 晁
発 行 所	株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8
電 話 東 京 (291) 7651番(代表)
振 替 東 京 4 1 2 3 番

© 1965

暁印刷・山晃製本

はし が き

この往復書簡集二巻におさめられている宮本顯治・宮本百合子の手紙は、一九三四年十二月から一九四五年八月十五日、日本の無条件降伏後、治安維持法が撤廃されて、十月十日網走刑務所から顯治が解放されるまでにとりかわされた書簡、百合子凡そ千余通、顯治四百通ほどの手紙の中からえらび出されたものである。

一九三二年三月下旬、宮本顯治はプロレタリア文化団体に加えられた弾圧によって非合法生活に入った。そして一九三三年十二月、スパイの手引によって検挙され、一ヶ年間留置場生活を経て、未決におくられた。往復書簡は自然、その一年間の出来事にもふれているので、「十二年の手紙」とされている。

目次

はしがき

一九三四年（昭和九年）	7
一九三五年（昭和十年）	21
一九三六年（昭和十一年）	27
一九三七年（昭和十二年）	48
一九三八年（昭和十三年）	97
一九三九年（昭和十四年）	136
一九四〇年（昭和十五年）	196
注	231

十二年の手紙

（上巻）

一九三四年（昭和九年）

十二月七日

上落合の百合子から
市ヶ谷刑務所の顯治宛

第一信。（不許）

これは何と不思議な心持でしょう。ずっと前から手紙をかくとぎのことをいろ／＼考えていたのに、いざ書くとなると、大変心が先に一杯になって、字を書くのが窮屈のような感じですよ。

先ず、心からの挨拶を、改めて、ゆっくりと。――

三日におめにかゝれた時、自分で丈夫だと云っていらしたけれども、本当は余り信用出来なかったのです。叔父上が、顔から脚から押して見てむくんでいないと仰言ったので、それでは本当かと、却ってびっくりしたほどです。それにしても体がしっかりしていらいっしゃるのは何よりです。私とは勿論くらべものにはならないけれども、私は一月から六月中旬までの間に相当妙な調子になって、やっとこの頃普通にかえりましたから信用しなかったのも全く根

拠のないことではないわけです。

叔父上は十二月六日に林町にお出でになり父にも会われ、いろ／＼のお話を伺いました。さしいれのこと、弁護士のこと、毛糸であんだ足袋のこと、いろ／＼承知いたしました。お弁当のこと、弁護士のこと、大体私もそのように考えて居りましたから御安心下さい。籍のことももう余程前からの話なのですが、やっと今度お話になられ、私も非常に満足です。あなたも其を当然のことと感じて、御返事下さったということはこれも亦私にとっては様々の意味で愉快なことです。そういう私の心持はおわかりになるでしょう？

五日に叔父上のお会いになったときは、もうあの百日カズラに髯ボーボーではなかったってね。着物は先のまゝであつたそうですが、今日あたりは差し入れたのが届いただろうと思つて居ります。帯をしていらしたというけれど、それはどんな帯だったのか、私の入れたやすものへの帯かしら。それとも違ふのかしら、と叔父上に伺つたら「ヤアそれは気が付かざつた」と首をぢめておいででした。六日の日は、お昼を竹葉の本店へお伴して、座敷が大変お気に入り、今日七日はおひる父と三人で、銀座の星ヶ丘茶寮の出店。かえりにずっと上落合の家へおいでになり、ねころがったり起きたりよもやまのお話ですっかりくつろ

がれました。夕飯を壺井さんと三人でスキヤキをたべて、それから東京駅へお送りして行つて、九時ので大阪までお立ちになりました。もう五分くらいしかないので、私が寝台から出て来ようとする、と、どっかで林町の父のお得意の口笛の音がするので、キヨロ／＼したら、急いであつそうな顔をしなから片手に浅漬の樽を下げてお見送りに来たのでした。

私は島田の父上の御好物の海苔をおことづけ願いましたし、べつたら漬もあるし、まあ東京からおかえりらしいお土産が揃つて結構でした。

お立ちになってから林町へ一緒にまわつてお風呂に入つて、十二時一寸前家へかえりました。栄さんがあなたのシヤツ類を編んでいてくれたのが待っていて、お茶をのんであのひとはかえり、私は島田の母様が私へ下さったお手染のチリメンの半襟を又眺めなおして、いただいたコーセンをしまつて、手伝いに来ているお婆さんをやすまして、それからドテラを着てね、さて、と机に向つたわけなのです。机はやつぱり昔ながらのテーブルで上には馬のついた紙おさえや、ガラスのペン皿やを置いてこれを書きはじめているのですが、あなたは、上落合のこの辺を御存知かしら。中井駅という下落合の駅の次でおいて、小学校のつき当りの坂をのぼつたすぐの角家です。小さい門があつて、わ

り合落着いた吾など生えた敷石のところを一寸歩いて、格子がある。そこをあげると、玄関が二畳でそこにはまだ一部分がこわれたので、組立てられずに白木の大本棚が置いてあり、右手の唐紙をあげると、そこは四畳半で、簞笥と衣桁とが置いてあり、アイロンが小さい地袋の上に光っている。その左手の襖をあげると、八畳の部屋で、そこには床の間もあるの。なか／＼通りなものでしょう？そこへ私は茶簞笥をおき、長火鉢をおき、長火鉢と直角にチヤブ台をひかえて、上で仕事しないときは、そこに構えているわけです。八畳からすぐ台所だというのが私どもの暮しかたには大変いゝ工合なのですが、生憎井戸でね。朝まだ眠いのにかでガツチャン／＼、裏の長屋でガツチャンガツチャン。はじめのうちは馴れないので閉口でした。アラ、チブスになるわよ、とスエ子等は恐慌的な顔付をしたが、まさかそれは大丈夫でしょうから、どうぞ御心配なさらないで下さい。水道をひく相談をはじめたら、なか／＼はかどりません。井戸の水はたゞ。水道は最低九十三銭。だからいらないと裏の意見だそうです。尤もだと思ひ大多數の便宜に従います。

（台所へ出てから、二階への梯子があり（これは玄関から障子をあげても行けるのです）、二階も縁側があり、入つてすぐが六畳、奥が四畳半。六畳の方に山田のおばあちゃ

んのくれた机をおいて、四畳半へテーブルと、あなたのつかっていらした本棚をおきおさまっている次第です。二階の景色はよくてテーブルの右手の小窓をあけると、小学校の庭と建物越しに下落合の高台が見え、六畳の方の小窓からもそれについて景色が一望されます。小学校だからチーチーパッパで、とき／＼はやかましいが、清澄なやかましきで、神経には一向にさわりません。カン／＼とよく響いて鐘がなったりしてね。窓から見ていると、友達にトタン堀の隅っこへおしつけられた二年生ぐらいの男の子がベソをかいて、何か喋っていることがあります。下の八畳も二階も、それはよく日が当って、実にからりとした私たちに似合った家です。家賃三十円也。井戸だし、少し不便だし、だからその位なのであらうという定評です。

達治さんがこの一月二十日頃に入営することを叔父上がお話になりましたか？ その前に出来たらあなたに会われたらいいと思つたし（そちらにいつ頃まわるか私には見当もつかなかったから）母様の御出京の話もあったので、とりいそいで家をもったわけでした。あなたは御存知ないことだけれども、一昨年（一九三三年）の十月末から国男夫婦がケイオー病院のそばに家をもち、私はずっとその二階で暮して居りました。その家は、林町の母が本年六月十三日に肺のエンでなくなり、（私が臨終の僅か五分前に辛うじて淀橋から

かえって会う事が出来た後）引はらって、国男夫婦は林町にかえりました。私は夏ごろはずっと歩けなかったし、心臓衰弱で毎日注射していたし、すぐに家をもつことは出来ず林町の二階の長四畳へテーブルを持ちこんで、十月以後は、文学的な感想や評論のようなものを相当沢山かき半年前よりは発展をとげたということで一般に好評でした。現代文化社というところで私の最近の評論感想集を出すので、多分一月頃出版の運びになるだろうと思つて居ります。

本年一月の『文芸』にかいた「小祝の一家」という小説は三一書房という本屋から出たいろ／＼な人十七人の『われらの成果』という小説集の中に集録されました。その小説集には島木健作「癩」、平田小六という「囚はれた大地」という長篇小説をかいた元隆章閣の人などとはいっているし、婦人作家では私のほかにいね子、松田さんなども居ります。藤島まきという作家も出ました。文学におけるリアリズムの問題が、はじめ妙な傾向をもつてトリビアリズムと混同して出されたし「ナルブ」は二月解散になったし、今もつてその点では問題がのこされている有様です。私はそういうことについても、其だけ切りはなして云々せず、例えば窪川鶴次郎の「風雲」という小説の批評や、横光利一の大評判になった「紋章」などにふれつゝ作家としての仕事ぶり生活ぶりにふれた感想そのものの書きかた、

現実の生活的な問題としての文学理論上の問題の捉え方そのもので、正常なリアリズムの発展的な方法を示してゆくよう努力しているし、そのために好評でもあると思われる。小説について一九三二年の春ごろよりは又一段腰がすわったから、これからはいくらか書けます。何か、こゝ一年の間に、私は作家として大分様々のものを見きゝし、感情を鍛錬され、一層深く強い確信の上に立って生活するようになったから、どうぞ悠々とたのしみに私の仕事ぶりを見て下さい。十一月二十日に朝日講堂で神近さんの婦人文芸主催の文芸講演会では私の話がよるこばれ、私としても、あんなに身をいれて、わかりやすく、文学といっても一般化して云うことは出来ぬこと、文学を作るものの社会生活が反映して来ることを様々の作品の例をとって話せたことはなかったと思います。そのときの漫画はね、まるでバルザックみたいな（これは今井邦子の評）上半身の横に、一つ土瓶が描いてあるのです。私が土瓶一つからだって、見るその人の生活によって、どんなに聯想の内容がちがうかということ云ったからでしょう。文学における表現の形象性と云えば、重ね引出しを整理したら、そのことについて、あなたが中途でやめておきになった古い、多分三四年昔の原稿が出て、その一枚を私は黒い細い枠に入れ、こうやってかいている机の横の壁にかけて居ります。わき

の小窓にかゝっている紫っぽいところに茶の細い格子のある毛織地のカーテンと原稿紙の字とは大変美しく釣合つて、稲子にさすがだといつてほめられました。まるでお話ししながら、そこに全体の仕事を感じながら、自分も仕事をしているような居心地よさです。美しさというものは何と活したものでしょうね。何一つめざらしいものではなくて、しかもこれらのものは本当に堅実で、雄々しく美しくて鼓舞的な輝きを含んでいるのです。その枠の下の本棚は私の御秘蔵本棚とも云うべきもので、いろいろ愛する本を並べて居ります。

この家へ越したのが十一月二十日です。引越し通知のハガキはもう御覧になつて居るでしょう？ あれも壺井さん夫婦が世話をやいてくれたのです。お正月のハガキもやってくれるそうです。私たちの結婚通知の印刷物以来の恒例だからやつてくれたのです。——原泉夫（ハルノイノ）妻は四谷の大木戸ハウスというアパートで細君はトムさんの新協劇団第一回公演では「夜明け前」に巡礼をやり、今やっているゴリゴリの芝居では何をやっているか、旦那さんの方はきつと徹夜して小説かいてるでしょう。今夜見物する予定でしたが叔父様をお送りしたからやめになりました。

この近所には千葉で三年ばかり暮すことになった山田さんの奥さん（ヨシ子）もいるし、河野さくらさん（ハタノ）が留守中のひとり暮

しをして居ります。

ところでお読みになる本について、私ははっきりしたお手紙を見るまで自分の考えで入れるしかないのですが、文学に関する本では少し古典と現代の諸潮流の作品とを系統たてて読んで御覧になりませんか。あなたが三日にまだプランをもっていらっしやらなかったのは私には自然に感じられたし決して意外ではありませんでした。私の文学的ウーニクを示すようにいゝ順で一つよませて上げたいと考えて居ります。文学・美術・音楽等についての本は大体並行して一冊ずつよめるようにいれてゆきましよう。その他の種類で、あなたが実際の知識を主張していられしやるのは当然ではあるが私は深く満足したし、自分の考えと同じ考えを知って嬉しゅうございました。哲学についても、私はきつと同じように、今の哲学の動きに興味をお持ちになっているであらうと思うのですがどうかしら。當っていますか？もし御同意ならやはりそのようなものを心がけましよう。それを手当りばったりでなく、様々の点で順をふんで入れます。だからその順にあなたは注意をなすって下さい。よまない本があつてもかまわないから。読んでしまつて返す本はそちらで郵送宅下げの手続きをして下さると、一等便利でしょうと思います。これは三日に云うのを忘れました。

この手紙はいつ頃あなたのお手許に届くでしょうね。そして、あなたのお手紙はいつ頃私のところへ来るのでしょうか。私はこうやってかいていて、六つばかりのとき母がランプの灯を大きくしてロンドンにいる父のところへ手紙をかいていた時の若々しい情熱に傾いた姿をまざまざと思い出します。私の手紙はきつとアメリカへ行く位かゝつてあなたのところへ届くのでしやうね。

私は体によく気をつけ、健康ブラシをつかっているし、よく眠るし、美味しがってたべるし、いゝ状態です。家のことをしてくれる者が落着いたらそれから小説をかきはじめます。私は胸にたまつたものを一通り吐き出してしまわなければ小説はかけないので、この月はたくさんほかのものを『文芸』や『行動』や『文学評論』やらに書いたがこんどは小説です。私は来年にはうんと長い大きい小説にとりかゝります。そのかけの内容が私の体について来た感じのです。その身について来たものの一つの例であるが、大きい文学に必要な豊富でリアリスティックな想像力というのは、現実をよくつかんで、しつて、噛みくだいていなければ生じぬものですね。そして、そういう力なしに大きい作品は書けないのだが、私は自分が過去二三年の間、そのひろくて、熱のある想像力の土台の蓄積のために随分身を粉にしたし、そのおかげで今日自身が仮令僅かなりとも

そういう文学上の力を再び我ものにしたことを実感しているのです。私はやっと生活の上で闊達であるばかりでなく文学の上でも闊達ならんとしているらしいから一層慎重に勉強をすゝめるつもりです。

あなたに叔父様は目のことを注意なすった様子ですが、呉々も読みすぎぬよう願います。それから風呂へ入るとき風呂桶のフチや洗桶をよく／＼気をつけ、穢らしいバチルスを目になど入れぬよう、本当に気をおつけになつて下さい。私はあなたについては下らぬ心配を一つもせず安心しているのですが、そして、私はよく仕事をして丈夫で、私の周囲の人のよろこびと希望の源泉となつて丸々していればよいと信じているのだが。そういうことを考えると非常に心痛します。用心を忘れないで下さい。鼻はいかがかしら？ 便通は？ そう、こんなことも今に追々わかるでしょう。もう夜が明けてしまふかしら、ではおやすみなさい。よく眠るおまじないをどうぞ。

第一信の附録二枚。

これを書いているのは次の日のつまり土曜日の夕方です。今日は曇つてなか／＼ひえます。うちの近所に美味しい餅屋があるので、林町の父のために、さっきお餅を注文したところ。庭が五坪ばかりあって、椿の蕾がふくらんで、赤

い山茶花が今咲いています。その一枝をとつて来て、例によつて机の上におき、それを眺めて眼をやすませながら、これからバルザックについての感想をかくところです。

ゴーゴリ全集やバルザック全集からこの頃はモリエールの全集まで出るの。バルザック協会がゲーテ協会に対するものとして出来て、なか／＼古典は出版されます。出版されるのであつて、真に研究されるのでないところに、文学の窮乏があるのでしょう。ドストイエフスキーなどがよみ直されるのみならず、人間の神性とか獸性とかいう問題にからんで云々され、不安の問題が上程され、その深めるための文学的勢力はされずに舟橋聖一氏は文学における行動性ということを主張しているし、なか／＼壮観です。その行動性のモデルのようにゴンクール賞をとつた『勝利者』という小説の翻訳が出ました。小松清氏というフランスにいたことのある人がホン訳したので、まだ二三頁をよんだにすぎませんがジャーナリストイックなものだし、又エキゾチズムがつよい。フランスでエレンブルグが書いたものを思いおこさせました。私のバルザックについてかきたところは、ある人々によつて云われているようにバルザックが何でもかでも書きたいことを書いたのだがそれは歴史を正しく反映したから、我々もそうやろうということについての不用意の点です。バルザックが、今日いう意味で

はリアリストでなかったのだし、彼のロマンチズムがその時代の必然によって、リアリズムを既に内包していたこと、その二つの矛盾が作品のすべてに実に顕著に顕れていること、従って、林氏亀井氏保田与重郎氏の云う日本ロマン派がそのうちに内包し得るものは何であるかということなどなのです。十月にトゥルゲーニエフの研究を三十枚ばかり書いて、面白くよまれました。しかしバルザックはどういう風に出来るか。月曜日に毛糸の足袋と下着類と戦争論その他を入れます。私はこの頃になって、もう一遍一寸メーテルリンクをみて、何か発見して見たいと思うことがあります。それは、これまでの作家が運命というものについて、実に多く書いているが、メーテルリンクは彼の神秘主義で、青い鳥でそれをのりこえることを語ったと思う。賢ささというような力で、賢者がよく出たでしょう？ 彼の作品には。悲劇というものも、私は又考え直して見たく思っている。メーテルリンクとは違うが（云うに及ばないとニヤリとされそうですね）私は過去の文学に規定されている悲劇というものの理解について疑問が出て来た。或る生活の中に生じる波瀾かっとうは非常に苛烈であって、異常であるが、それに対する理解が驚くべき見とほしによって貫かれていて、当事者がそれを悲劇以上の把握で捉えて生きぬく場合、それは文学に描かれて悲劇の程度に止って

いるであらうか。リヤ王なんかは悲劇だし、オイデプスなども悲劇に違いないわね。だが文学は内容を新たにしていかに至り、現実を、現象的につかんで、だけ書き得る所謂悲劇は、高められている、否、高められる可能性に立っていると少なくとも私は自身の文学の前面にそのようなものを感じているのだけれど。

これはこうかくと平凡のようだが、小説をかく心持の上ではなか／＼平凡ではないのよ。

バルザックが或時代の或タイプを描いたという評言を後生大事にかついでおまもりのように云っている人があるが、或タイプといつてもそれは社会的活動の關係の中で立体的に描かれなければならないので、型として、内的外的活動を規定の枠内で行為させているのは一種の善玉悪玉式で、龐大なロマンチズムではありますまいか。人道主義的ロマンチズムをかく／＼けて若いゴリキイに影響したディケンスなど、こんどよんで御覧なさいまし。クリスマスカロルなど、スエ子がきのうよんで、何だかいやな気がしたと、ひどく気分的に表現していたが主人公がこゝでも、全くあり得ぬようにセンチメンタルに架空的にとらえられているのです。

ねえ、私は用心しなければいけませんね。こうやってかいていけばいくらだって書いて、随筆幾つか分の手紙をか

いてしまひそうです。私たちが暮して間もなくあなたは、私がどんな手紙をかくかしらと云っていらしったことがあったが、いかが？ 私の手紙は。私の手紙には私の声が聞こえますか？ 私のころ／＼した恰好が髣髴いたしますか。その他さまざまの時に見える私が見えますか？ 三日に余り久しぶりであなたの声を聞いて、私は今だに耳に感じがついて居ます。こゝでさえペンをもっていると手がつめた。い。（附録終り）

十二月十三日

市ヶ谷刑務所の頭治から
上落合の百合子宛

第一信 移転の知らせ落手した。それから色々の差入物も有難う。こゝに来てもう二週間近くになるが、楽しく読み、よく眠り、暖く着、しかも約一年振りで蒼空の下で運動も出来るし、安心して呉れ。こちらには案外に早く来た。早くて来春まではかゝるだろうと思つていたのだが。向うでは、一月末熱病にかゝって、四十日余こゝに来ていたが、その全快後は身体の諸組織が調子よく改造されて、一時は食欲旺盛に困った位だった。甘いものの夢を見たりした。その後は、夏頃軽い脚気の気味があつたが、すぐよくなり、全体として極上の健康状態^三で、今日まで過した。精神上の確乎とした安定性が、健康の前提条件である点はもちろん

だが、自分は、よく食事をかむこと、冷水摩擦、手足の神経の摩擦、出来るだけ姿勢正しく丹田に力を入れて坐ること、等を心がけた。

さてこの間に、外でも色々変つたことがあつたらう。歴史の齒車はその細微な音響を、ここには伝えないが、この点に関しては、何等の懸念もない。この間、ユリが来たとき、林町のお母さんのおなくなりになったということも始めて、はっきり知つた。いつか一緒に行つて歌の話を聞いたりした記憶がよみがえってくる。それにつけても林町のお父さんの色々の御心労もよくわかる。ユリから宜しく御伝えして呉れ。国男さん、咲枝さん^三達の御芽出度のことそのうち吉報を聞くことが出来るだろう。警察にいるとき、差入物等の御世話をかけていると思う。お礼を云つて呉れ。寿江子さんのアコーデオンも進んでいることだろう。故郷の父の容態のことは、此の間叔父からも聞いた。衰弱がひどいときには、胃腸を休養させて栄養をとるには、わかもと、どりこの、ブルトーゼ等の併用がよいと多少医学をやつた人から聞いたことがある。知らせてやつて呉れ。ユリも健在でよい。『文芸』の「小祝の一家」は自分が外で読んだ小説の最後のものだったが、中々新鮮で、プレテューだった。新しい芸術的様体の課題に小規模ながら答えようとしている。たゞ主人公の描写に今少し中心的力点がおか